

---

# 会社ごっこ

三塚 ユニ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

会社「つこ

### 【Zコード】

Z5576D

### 【作者名】

三塚 ユニ

### 【あらすじ】

倒産してしまった会社を舞台に繰り広げる、コメディタッチな出来事の数々・・・。嘘か誠かの境界線がアバウトではあるが、全て実話を元に書き下ろしました。あなたの会社でもこんなタイプの上司がいるのではないか？キャラの濃い人々達がおおいに笑わせてくれます。仕事や人間関係で悩んでいるあなた！もつと哀れな会社がありますよ。さあ！この小説を読んで思い切り笑い、憤り、涙して感情の老化を防いで下さい。

## 第1話 やる気がでないのは？

今日も会社は活気なく始まつた。空気が濁んでいる工場現場。整理整頓されずに撒き散らしてある製品。化学薬品が反応して出る鼻をつくような異臭。

もともと電燈も暗い製造現場なのに、少ない窓の前にまで紙袋の製品が積み上げられていた。それに追い討ちをかけるように、床の色のグレーが一層鈍よりとした空気をかもし出している。

智美は、そんな工場を歩く度に憂鬱な気分になるのだった。

「あーっ。何か楽しいことはないのかな？今日も暗い雰囲気・・・」  
思い切り深呼吸でもして、この重い空気を一新させたかった。でも、そんなことをすれば鼻先からのシンとしめる臭いの刺激で目からは涙が出てきてしまう。今日の空気は尚酷かつた。智美は自分の目が霞んでいるのかと思った。霧で視界が悪い訳ではない。湯気で向こう側が見えない訳でもない。工場の換気孔が故障していて、化学反応から出る煙りと、掃除を怠っているために何年も蓄積された埃や原料の粉が舞い上がって、まるで靄がかかったかの如く目をかすめているのだった。

「わっ。何？この息苦しさ…呼吸出来ないやん。」

いかにも体に悪そうな現場の空気に、智美は息を止めて速足で駆けて行つた。現場で働いている人の中には、マスクもせずに作業をしている人もいる。この環境の中、重い製品を運んだり機械を分解したりの重労働はどれほど大変な事だろう。智美はそんな現場作業員に敬意をはらいつつも、この鼻につく吐きそうな臭いと息苦しい空氣に、どうしても怪訝な顔つきになるしかなかつた。爽やかな笑顔で

「おはよっございまーす」

なんて言えるような雰囲気ではない。挨拶をしてもこの環境の中、元気に返つてくる声などあるはずもなかつた。

月曜日。お決まりの全体朝礼が従業員食堂で行われる。

「は～っ。今日から仕事が始まるのか…金曜日まで長いな～」  
朝礼に行く時、女子従業員はみんなため息をつきながら朝礼に向かうのだった。130名の従業員のうち、8名が女性。少いだけにまとまりはあつた。そのほとんどが各部署で事務をしている。事務と言つても簡単なパソコンへの入力作業が主な仕事だ。たいした仕事を与えられず、女性は愛想よくお茶くみをしていれば良い…といつた封建的な考えが、まだこの会社では存在している。それだけに能力を発揮する事も許されない。だから、女子従業員のモチベーションは常に低く、仕事にやる気が出ないのは非常にもつたない事だ。智美も仕事が持るように、気付いた事を何度も相談してみた事があつた。しかし、決まつてああだ、こうだと悲観的な考えに基づいて却下されてしまうのだ。

「つまらない。会社に来るの、怠いなあ。」

智美は、大きくため息をついた。ため息はあまり好きではなかつた。何故なら周りの人にも不快感を与えるし、ため息をついたところでこの会社が変わつて楽しくなるはずもないからだ。それは、幸せをみすみす逃がしているようで智美は極力ため息はつかないように心掛けていた。しかし、これから一週間、この会社で仕事をしないといけないのか…と思うだけで自然に漏れてしまった。

前では社長が小さな聞こえない声で、実績の数字らしき事を話している。最後列の智美からは従業員の様子が一望にして見る事が出来た。誰一人耳を傾けている人はいない。隣の者と喋る人、窓にもたれて外を見ている人、携帯をいじつている人、立ちながら目を瞑つて寝ている人もいる。いずれにしても社長の話は馬の耳に念仏…といった具合だ。

ある日の午後。みんなでお弁当を食べ終わ

つて、お腹が満腹になつてきたところで智美は大きな睡魔に襲われた。隣で座っている総務課の静江は

コーヒーを飲みながら外を眺めてコツクリと船を漕いでいた。山に囲まれた工場は、紅葉も色鮮やかに小春日和の淡い光に包まれていた。

「これは絶好のお昼寝TIMEなのに・・・」

会社で仕事をしているのがもつたないような天気を恨めしく思いながら、智美は憂鬱になるあの工場現場へと向かうのだった。

相変わらずの薄暗い作業場。匂いはいつもよりはマシなのは有難い。しかも、良い気候のせいもあって幾分かすがすがしい気分で工場内を歩いていた。突然、どこからか大きな声がした。

「お~い。お~い！」

智美は声の元を探した。作業しているはしごの上から、体格の良いおじさまがこちらに向かつて叫んでいた。現場で交代勤務をしている、金田さんだつた。上から続けて叫んでいる。

「これでジュースでも買いや~」

と言いながら固まりが頭上から降つてきた。ガムテープに百円玉を五枚貼付けて丸めた物が、智美的足元にポトリと落ちた。かなり驚いたが、

「えつ！いいんですか？ありがとうございます。」機械の騒音が煩いため、大声を張り上げながらそれを拾い、智美は深々と頭を下げた。

「また、無くなつたら言つておいでや」

智美は飛び切りの笑顔で手をあげた。正直こんな物が降つてこようとは夢にも思わなかつたが、女性の人数が少ないせいもあって自販機の前で出会つただけでも、ジュースを買つてもらえる事が度々あつた。

総務の静江は鼻筋が通り、大きな瞳で綺麗な顔立ちをしているので、つねに男性従業員からおじつもらつていた。だから自分のお金でジュースやコーヒーを買った事が一度もないのだった。目立つた美人でない智美でさえも、現場を歩いていると何度もジュースをご馳

走してもらえた。仕事に関しては、あまりやり甲斐を感じなかつたが、こんなに女性を優遇してくれる環境はなかなか居心地が良いものだ。

「今まで働いた会社でこんなにおいじりももらつた事ないな。今日は現場を歩いてラッキー」

本当に有り難かつた。ジュースを買つてくれる人達には、何か別のかたちでお返ししなくちゃ……智美は、ガムテープから百円玉を一枚ずつはがしながら、小銭を入れているぬいぐるみの形をした財布に収めるのだった。

それから、金田は智美と会つ度にジュースを買つてくれた。歩いていると後ろから

「おーい。自販機に行こつか?」

と声を掛けられた。智美は

「ありがとうございます。いつも申し訳ないです。たまには私がご馳走させていただきますよ。」

と言つた。

「何言つてるねん。女性におごつてもうたら男が廢るわ。遠慮せんでええから飲め。」

なんて男気のある人なんだろう……肝つ玉が大きいなあと智美はある種の尊敬の念をいだいた。そのうち冗談を言つたり、家族の事などを気さくに話す間柄になつた。近くなるにつれ、金田が軽く体にタッチしてくるのは気になつたが、やらしい下ネタで不快な思いをする事もなかつた。それに何と言つても毎回気前よくジュースをおごつてくれるし、バレンタインデーにチョコをあげるなどびっくりするくらいのお返しがホワイトデーには待つていたので、気のいい『おじ様』だと信用していたのだった。

頬にあたる風が冷たく感じるよつになつたある日、智美は同じ事務所の千佳と現場を歩いていると金田から手招きされた。

「えつ！私…？」

と自分を指差しながら聞くと金田は頷いて、再び手招きしてこっちに来るよう促した。金田のところに小走りで行くと肩に手を回して、

「ちょっとこっちに来てくれ」

と人気のないところに導かれた。肩に手を回された事でかなり違和感を感じていたが、やらしい感じはしなかつた。むしろいつもと様子の違う金田を見て智美は心配した。

「どうしたんですか？何か困った事でも…？」

「流石、智美ちゃんや。ワシの事ようわかつとるわ。あのな、実はお金工面でけへんか？」

「えつ！あの…お金ですか？」

智美は驚きを隠せなかつた。あんなに羽振り良いくつもジュースをおごしてくれている金田からの意外な申し出に、かなり戸惑つてしまつたのだ。

「ワシのこれが、これなんや。」

金田は小指を立てた後で、右手をお腹の前で大きく半円を描くように、出っ張る真似をした。えつ！それって蒲田行進曲のワンシーンみたいやん…智美の脳裏にはそれと同じような映画の場面が過ぎつた。しかも金田は離婚して独り身と聞いている。家族がいなから、気軽に女の子達にジユースをおごってくれているのだと智美は思つていた。何が何だか疑問を整理しながら即答を求められている事に気付いた。そうだ、お金を貸す話だつた。現実に引き戻されて智美は何て答えたらいいのか考えていた。いつもおごってくれている。可愛がつてももらつてゐる。そんな金田からのお願いを聞いてあげ

たいのは山々だった。ケチで渋っている訳ではない。ただ、お金の貸し借りのトラブルで、兄弟までもが仲たがいしているのを見た事があるだけに、慎重にならざるを得なかつた。

「あの… 金田さん。私も力になりたいのですが、給料日前であまり持ち合わせもないんです。一万円くらいなら都合つけられそうですが、そんな僅かな金額でもよろしいでしょうか？本当にすみません。」

申し訳なさそうな智美を見て金田は、

「すまんのはこひけの方や。智美ちゃんにまでこんな事頼んで、ワシ情けないなあ。」

いつも大きな声で、堂々としている金田の影すら感じられないその態度は、気の毒に思えてきた。智美は今まで金田にしてもらつた事を振り返っていた。2階からお金を落としてもらつた事。機嫌の良い時は、ポケットにお札を数枚挟込んできて

「こんなの、頂く理由が見つかりませんから。」

と返そようと智美に、

「ええからとつておけ！ 一旦出した物を男はしまえへんのや。遠慮せんと納めときや。」

と何度も預戴した事。会つ度に自販機にお金を入れてくれて  
「好きなジュースのボタン押しや」

と買つてくれた事。どれも有り難く嬉しい気持ちにしてもらつていたのは確かだ。

「一万円、金田さんにあげようー今までしてもらつていた事への感謝の気持ちで…返してもらわずに差し上げようー！」

智美はそう決意して、金田に明日お金を持つてくる事を約束したのだった。

次の日。お金の入った封筒を持つて智美は工場の現場へと向かつた。金田に渡す時、返金はしてもらわなくても良い事を伝えるつもりで…ところが、いつも作業している場所に金田の姿はなかつた。智美は金田が居そうなところを探したがやはり見当たらぬ。同じ部署で働いている人に聞いてみると、金田は休んでいるという事だつた。

「約束してたのにどうしたんだろう?」

智美は不信感をいだいた。50半ば過ぎの金田は、離婚歴があると聞いている。本当に彼女がいて子供が出来たんだろうか?その上、最近は急な休みが多い…と課長の丸山がボヤいていたのを思い出した。あんなに羽振りよくて、気前の良い金田がお金に困つてている。智美にまで頼みにくるくらいだからよほどの事だろう。「約束したんだから、とりあえず明日出勤してたら渡そ。」

智美は、そう言い聞かせてお金の入った封筒をポケットにしまい、現場の休憩室に書類を持つて行くために向かうのだった。

休憩室の中は、工場の中以上に空気が薄かつた。ここは唯一、作業員の喫煙出来る憩いの場なのだ。普段誰もいない時は電気を消してある。省エネのため、経費節約のためどこの会社でも最低限していれる対策ではあつたが、それ以外に休憩しているのが外から見てわからないのにも好都合だつた。誰もいないと思って電気のスイッチを入れると、所狭しと5~6人が椅子に座つていたので、智美は驚いて「きやつ!」

と小さく叫んだ。大きさにしてタタミ6畳くらいの細長い部屋で3人がタバコを吹かして喋つっていた。窓のない休憩室は、煙の行き場がなくて白く靄がかかつたように渦巻いていた。部屋の掲示板に張り付けられてある連絡事項が書かれた用紙や、出勤状況を記入する紙は、タバコのヤニで黄ばんでいる。そんな中で腕と足を組みながら椅子に座り、寝ている人もいた。息苦しさを我慢しながら、智美はわざと元気よく、

「すみません…」に今日の仕上がりを書いて下さいね。お願ひします。」

と言つて立ち去つたとした。早くこの空氣から開放されたかつたが、そつまをせてもらえなかつた。

「あつ、智美ちゃん。ボールペン持つて来てくれるか?」

「はいっ! ボールペンですね。すぐにお持ちしますね。」

「修正テープとカッターナイフの刃も頼むわ。」

「わかりました。」

「ワシには安全靴を発注しててくれ。」

「はいはい。安全靴ですね。サイズを聞かせて下さい。」

「そうやなあ。今なんぼのサイズやろ?」

そう言いながら、靴を脱いでサイズを確認し始めた。「あれつ? 消えてしまってわからんなあ。」

「普段は、何センチの靴を履いていらっしゃいますか?」

「忘れてしもたわ。」

……あーつ、息が苦しい。髪の毛に煙草の煙がかかっている。臭いが髪に皮膚に染み込んでいく……早く、早くこの空氣から脱出したいよ。Help Me! ……智美は心中でそう叫びながら、おじ様が早くサイズを思へ出してくれますように……と祈つていた。

しかし

「ワシ最近物忘れがひどくてなあ。ほんまにわからんわ。」痺れを切らして智美は、

「じゃあ明日また仕上がり表を持つて来ますので、この血毛で靴のサイズを確認しておいてもらえますか? 違うサイズを発注しても、足が痛くなつて作業に影響が出ますものね。」

「おお、そうしてもらえるか? 悪いなあ、智美ちゃん。」

「いえ、お気になさらずに。」KBR と言いながら、このまま休憩室にいると肺ガンに侵される事間違いなしではないか? というのを気にせずにはいられなかつた。

「じゃあ、ボールペンなどの事務用品は後ほどお持ちしますね。」

そう言いながら、休憩室を足早に出ようとした智美に再び、KB R 「せや、智美ちゃん。金田の事知ってるか?」と声をかけられ

た。金田の名前を聞いて思わず足を止めた。出て行こうとしていた休憩室に戻りながら、

「金田さんがどうかしたんですか?」

「あいつ、今日も休んで競艇に行ってるんや。最近休んでよう行つとるわ。」

「えつー!金田さんって競艇をされるんですか?初耳です。」

「あいつ、えらい入れ込んでしもうてな。負けてばっかりで金回りに困つとるらしいねん。」

「へえーつ、そなんですか?お金にねえ…」

智美は、ギャンブルと金が一つの線で繋がる予測が出来た。謎が解明されていくような、モヤモヤがスッキリとしていく爽快さを感じながら、一方ではお金渡すのをどうじょうか?と考えていた。

「ワシらの班の中でも金を借りにこられた奴もある。負けたら金が戻つてこんらしいぞ。」

そんな話を聞いていると、ますます迷つてしまつ。が、最初からお金は返してもらひつもりではなかつたんだ!私にお金を借りに来た事も、他の人達には伏せておこづ。そして競艇に行つてるとこの話は聞いてない事にしておこう…と智美は自分に言い聞かせて納得していたのだった。

翌日、いきなり朝に金田とロッカーの前で出会つた。昨日、自分なりに金田への対応は考えていたものの、朝一番に会つ事は想定していなかつたので、不意をつかれてどう切り出してよいか言葉が出てこなかつた。金田は競艇で負けたのか?どことなく元気がなく、いつも堂々とした威儀のある態度も影を潜めているように思われた。

「あ、おはようございます。あの~実は昨日お持ちしたんですけど

…

最後まで言わないうち、「金田が話してきた。

「ワシ昨日は腹の調子悪てなあ。医者に診てもろてたんや。前の日に刺身食つたんや。トロもトロ、大トロの舌で溶けるような柔らか

いトロやつたわ。今度、智美ちゃんにも食わせてやるわ。せやけど、食い過ぎて夜中に痛うて痛うて我慢出来んかったから、休んでたんや。」

態度とは裏腹で調子のいい事を言ひてるだけに、ビリまで本当なのがわからなかつたが、智美は嘘を言つてゐる金田を氣の毒に思えた。「そうですか。それは大変な目に遭いましたね。もづよろしいのですか？」

「ああ、ワシは24時間働いた事のある男や。トロにあたつたくらいではくたばらんわ。」

「あまり無理なさらないよにして下せこね。とにかく、これは約束してお金です。」

茶色の封筒を金田に差し出した。

「それでね、私は金田さんに今まで色々と手をかけていただいてたでしょ？ これは私からの御礼です。だから、返さないといけない」とかいう気遣いは無用ですから、どうぞ。」

金田は一瞬驚いた顔をしたが、それはすぐに泣き顔に変わつた。

「智美ちゃん、ええ子やなあ。ほんまに優しい子や。ワシはこの恩を忘れへんからな。おおきに、おおきに。」

金田は智美的手をとつて、両手で何度も握手をしながら智美に礼を言つのだった。背中を丸めて何度も何度も有り難がる金田が小さく見えた。

「いえ、ささやかな金額しか入つていませんので、お気遣いはなさらないよに。」

智美は早くその場から立ち去りたかつた。昨日お金を渡す事を困惑した事や、たいした事もしてないのにそんなに恐縮されるのが心苦しかつたからだ。

そういうしている間に、現場で働く梅本が傍を通り過ぎた。智美的手をとつて泣いてゐる金田と、困惑顔の智美の方を横田に見ながら、何か言つたそだつたが黙つて行つてしまつた。仕事が始まつてからも智美は金田の事を考えていた。今日も仕事はたんまりとあつた。

現場から上がりてくる間違いだらけの計算や、ぬけもれだらけの帳票を保存出来る書類に仕上げるのが智美の仕事だ。電卓を慌たしくたたきながら、どうして金田が競艇にはまってしまったのか？羽振り良かつたお金を注ぎ込み、みんなにお金を借りてまで行かせる競艇つて何なのだろうか？智美には女に子供が出来たと嘘をついて見栄を張るのは男の意地なのだろうか？と目まぐるしく頭と指先を働かせるのだった。とにかく集中していた。だから隣の席に梅本が座っている事に全く気付かなかつた。

「忙しそうやなあ。」

声をかけられて顔を上げる。

「あっ、梅本さん。いつの間に座つてらしたんですか？」

梅本は来年に定年を控えた、会社でも年配でおじいさんのような存在だった。現場で出会うたびにとぼけた事を言つては楽しませてくれていた。天然のような冗談のようなどこかつかみどころがなかつたが、智美にはいつもジュースをおごってくれるおじ様の一人だつた。挨拶だけでなく、くだらない冗談を言い合つては笑っていたので、智美の中では親しいおじ様だつた。「智美ちゃんを驚かしたろ思つてな。息もせんと静かにしどつたわ。」

「あらあら、梅本さんつたら~そんなに急いで棺桶に入りたいのですか？」

「アハハ、棺桶か…もう片足突つ込んでるようなもんやわ。」

「まあ、嫌だ！梅本さんて冗談キツイですね。」

「何言つてるねん！智美ちゃんが棺桶の話題を出したんやがな。」

「そうでした。失礼しました（笑）」

いつもの調子で話しながら笑つていると、梅本が声を低くトーンを下げて聞いてきた。

「ところで、今朝金田と話しどつたやろ？なんやら手繫いで仲良さそにしどつたなあ～何を話しどつたんや？」

「あっ、あれはですね…」智美はどのように説明したら良いのか悩んだ。お金を渡した事は誰にも話すつもりはなかつたし、金田の競

艇遊びの話や 女性のお腹に子供の命が宿つた事など、事実確認ができるないので説明するにも時間を要する。咄嗟に出た言葉が、「昨日休まれた事を聞いてたんですよ。」

だつた。我ながらあまり冴えた答えではなかつたが、梅本はそれで納得するだろう…と軽く考えていた。ところが意に反して梅本はしつこくくらいついてきたのだ。

「なんで、休んだ事聞いただけで手繫がなあかんのや?お前りあやしいな。」

「はつ?あやしいってどういう事ですか?」

「出来てるんやろ?朝から会社でイチャイチャとやらしいわ。」

これには智美も呆れてしまつて、反論する氣にもならなかつた。梅本はもともと仕事の評価も芳しくなく、作業をするよりも口を動かしている方が多い…と同じ現場で働いている者はみんな怒つっていた。また、どこで作業しているのかが全く分からず、仕事で書き漏れがあつて聞きに行こうとしても、大概つかまらない。現場の人尋ねると、

「さつきは原料を計る作業場にいた。」

と言われ探しに行くと姿はなかつた。別の人聞くと

「印刷室におつたわ。」

と即座にその場所に行つてみると、

「もう、10分くらい前に出て行つたぞ!」

またもや行き違ひ…といった具合にいつも用事がある度、見つけるのに困難をきたしていた。揚げ句の果てに出会つたのは、食堂にある自販機の前で煙草を吸いながら「コーヒー」を飲んでいる梅本の姿。こんなに一つの事を聞きに行くのに振り回される人は梅本くらいである。しかしながら、骸骨のように細い体型と、分かつてるようで理解出来ない頭具合が何故か憎めない、面白いキャラを持つている。そのうえ、気前の良さで現場の人達にもコーヒー やジュースをおごつてやつていたので、仕事をしていない事を怒つている現場の人間でさえも、

「梅ちゃんは仕方ないなあ。」

なんて、これ以上求めても無理だと半ば諦めとも取れる考え方で納得されていたのだった。

「あやしい事などありませんよ。」

智美は小さい子供に話すようなゆつくりとした口調で話した。

「どういう関係を想像されてるか存じませんけど、私だけでなく金田さんにも失礼ですよ。勝手な想像で噂を起てられるのは心外です。梅本さんだつて、自分がやつてない事に濡れ衣を着せられて言い触らされるのは嫌でしょ？違いますか？」

智美が丁寧に説明するように、しかも堂々と言つてのけたので、梅本はポカンと口を開けて智美的顔を見ていた。言い返すにも言葉が出てこない様子で、座っていた席から居心地が悪そつに立ち上がる

と、

「チヒッ！ しうがねえなあ！」

と関東風のイントネーションで、気取った言い方をして部屋を出て行つたのだった。智美は梅本の背中を見送りながら、何故か笑いが込み上ってきた。梅本が仕事をせずに入人の噂話をあちこちでしているのは有名だつたので、それに釘をさせた事が爽快だつた。その上、普段とはちがう気取った言い回しが面白かつたからだ。二階の事務所から下を見下ろすと、梅本が階段を危なつかしそうに降りて行くところだつた。そういえば、以前階段から転げ落ちたので、降りる時は必ず手摺りを持つてゆっくりと足を運ぶようにしている…と言つてたつけ。その事を思い出して、智美は再び込み上げてくる笑いをかみ殺しながら仕事に戻つた。

## 第2話 オーティション

季節は進んで、すっかり寒さの厳しい冬へと突入していた。寒いのは気温だけではなく、会社自身も寒くて凍りついていた。何と言つても人間同士のコミュニケーションを取るのが下手くそで、まるで小さい子供が要求の通らない時みたいに…いい大人が本音を伝えられない不平不満で充満している。それは休憩室の煙草の煙りのようにもヤモヤと渦巻いていた。そして、言葉の使い方のわからない者同士が傷付け合い、あらゆる関係が冷え切っていたのだ。

「また、陰で悪口言い合つて…」

智美は呆れてため息をついた。「この会社に来てからというもの、ため息の数が増えて困つていた。

「こんなにため息ばかりついてたら、老け込んでしまう。ポジティブにいかなくちゃ！」

今日も自身に言い聞かせて仕事に没頭するのだった。

「智美さん、今日もオーティションがありますよ。」隣の席の静江が小声で教えてくれた。

「えっ！ 今日あるの？ って事は、また誰か辞めた？」「そうなんですよ。現場の伊藤君が、新しい会社に就職決まつたからつて丸山課長に言つてきたそうです。」

「まあ！ 伊藤君が！ ？ それ、現場の人すっごく困るやん。若い子がこんなに辞めていくんじや、この会社先行きあやしいね…」

小声で話していたが、ヒソヒソ声が耳障りだったのか、事務所の部長の岩崎が眉間に皺を寄せてこちらを見ていた。慌ててパソコンに目をやり、入力作業の続きをする。…あと何人の若者が辞めていくのだろう？ 今月に入つてから3人も退職している。残っているのは定年間際の50代後半の人人が大半だ。あと2～3年もすれば、団塊の世代の面々が退職する事になる。若者が辞める原因の一つには、

年寄りばかりで活気がないしつまらない… というのがあった。話題も合つはずがなく、孤立して辞めたくなるのだ。もう一つは女性が少なくて、華やかさに欠ける… と言つて辞めて行つた者もいた。工場でそれを求めるのはお門違いだが、やはり若い男性にとっては、それも会社に来る意欲が無くなる原因なのだ。とにかく若者が定着しない会社は先がないだろう。一度倒産をしているこの会社は、更正会社にもかかわらず、再び悪い一の足を踏もうとしていた。倒産前と違う事と言えば、社長を大きな商社から連れて来て、何の権限も与えずにお飾りしてあるという事だけだ。威儀

もなければ、意見を聞いてくれる人もいない… 経営者とは名前ばかりで、その孤独さゆえか常にブツブツと独り言が多くつた。だから事務所にいる従業員からもかなり疎まれていた。工場長との不仲は、誰がみても一目瞭然で二人の間の溝は大きくて深く、その上に木枯らしまで吹き荒れているといった具合だつた。どこを取つても上向きな話は出でこない。智美は、再びため息をつこうとしている自分に気付いて、吸つた息を深呼吸するよつこゆつくりと吐き出すのだった。

「毎度」！

大阪の本社から、面接をするために、大木課長がやつて來た。挨拶と言えばいつもこの言葉が出てくる。大木は、面接をする度にわざわざ大阪からこの田舎町に出向いていた。2時間弱かかる時間と特急電車に乗つての工場出社は、無駄が多い… と現場の課長である丸山の非難をかつていた。丸山は自分の部署の若者がどんどん退職していく事への苛立ちを、全て会社のせいにしていた。そのため、丸山は会社では厄介者扱いされていた。確かに丸山の無駄が多いという意見は的を射ていた。本社と言つても、在籍しているのは営業課と管理課の数名だけで、毎日のように誰かは田舎工場に出張してい

たからだ。しかし、それよりも丸山が何も動かない事の方が、現場で働く者達からは不満が洩れていた。もともと営業と事務をしていた丸山にとつて、製造課へ飛ばされたのは不甲斐なかつたのだろう。しかし、その人事を全て会社の工場長や管理部の部長のせいにしていた。

「会社の事を思つて意見したら、製造にいかされた。あいつら馬鹿だから、何もわかつてない。こんなに若い奴らが残りたくない会社にしたのも、あいつらのせいや。」

丸山はいつも部下達にそう唱えていた。しかし、仕事の相談をしても何の解決の糸口すら見出してくれず、行動を起こさない丸山はただの無能な上司であることは智美にだつてわかつた。会社を変えようと思えば、改革出来る立場にある課長という役割を活用してくれてない事が残念でならない。

「一回倒産したけど、更正会社の期間が外れたらまた倒産する。」

丸山の持論に現場の若い従業員は危機感を覚え、不安を煽りたてられて退職していく…というのがパターン化されている。それで、人員募集を余儀なくされ、最近はオーディションが盛んに行われているのだった。オーディションと言つてもちよつと笑える面接の仕方に、女子従業員から嘲笑されている事を管理部の大木は知る由もなかつた。オーディションはそんな馬鹿にした面接を皮肉つた言い回しであり、ジャニーズのオーディションのようにカッコイイ若者が直接に来て欲しいという女子社員の願いでもあつた。しかし、オーディションを受けに来る人と言えば、おおよそバック転などにはほど遠い50歳を過ぎた冴えないおじ様か、どう見ても動かなさそうな太めの若者だった。

「うーん、あれはどう考へても駄目やわ。なんでうちの会社つてカツコイイ若者がオーディションに来ないのかな？」

事務所を訪れるオーディションを受けにくる人員を見て、若い女子社員達はがつかりしていた。明るくてかわいい顔立ちをしている桃子は今日来た若者をばつさり切り捨てていた。何故なら、いきなり

## の大木の

「 $100 \div 4$ は？」

### の質問に

「20」と自信なさげな小さい声が聞こえてきたからだ。突然の計算問題に面を喰らったのか？はたまた、本当に計算できなかつたのか？定かではないが、ちょっと太めのその若者は、その質問以来、大木の見下した面接の餌食となつた。

「ところで、見たところ自分は線が太いけど、力はあるん？」

「はい。あると思います。」

「うちは25kgの製品入った袋を持って作業してもらわなあかんけど、持てるん？」

「はい。」

「なんで？」

「……。」

このやり取りを聞いていた静江と智美は、吹出しそうになる笑いを必死で堪えながら顔を見合せていた。「『なんで？』と言われても答えようがないですよね！」

もの静かな静江でも、壺にはまつたのかクスクスと口に手をあてて笑い出した。全くその通りである。智美も大木の馬鹿げた質問内容に苦笑しながら考えた。何故わざわざ本社から来て、こんな茶番な面接をするのか？どうして面接官が大木でないといけないのか？そもそもため口で面接するのは会社の品格を落としているのではないのか？と不思議でならなかつた。

本社でいる限り、工場が今どんな状態であるのかは、大木も見えてなかつた。いつも丸山と新垣の愚痴から情報を得ていたので、対応が多少ズレっていて苛立ちを覚えるのだった。新垣は、事務所にいる課長だった。鼻歌を歌いながら事務所に入つてきたり、頭の素早い回転から出てくるトークはみんなを笑わせてくれていた。ある意味みんなを和ませてくれる存在だ。しかし、隣の席の桃子は新垣のパソコンがつねに何も開いていないデスクトップである事に気付いて

いた。そして、工程表が出された時だけ何をするわけでもなく、それを眺めている…と言つのだ。確かに事務所で仕切っているのは、部長の岩崎だつた。しかし、岩崎と折り合いの悪い新垣は、岩崎が席を離すや否や部下達に向かつて批判を始めるのだった。

「あいつは暗い。いつも眉間に皺を寄せて、怖い顔してるやろ？なあ～そう思わへんか？あんな顔してるから部下に嫌われるんや！なつ、千佳ちゃん。」

「えつ！ああ…まあ…」女子社員も返答に困つた。だから、いつもみんな笑つてごまかすか、曖昧な返事で濁していったのだった。すると決まって新垣は、

「千佳ちゃん、岩崎が怖い顔してるなんて、ようそんな失礼な事言うなあ。女の子はキツイわ。」

と自分で振つておいたネタで、女の子の反応を見ているのだった。年齢がいつてる智美ならすぐに、

「言つてない、言つてない。それは新垣さんが言つたんでしょ？」と切り返すのだが、まだ若い千佳は引き攣つた笑顔で

「アハハ…」

と笑うのが閑の山だつた。

確かに、事務所の中に岩崎がいるだけで静かにしないと睨まれるため、ある種の緊張感はあつた。岩崎が現場を見に行くために席を外すと、新垣が酸素不足の金魚が水面に顔を擡げて口をパクパクするように、喋り出すのだった。息が詰まりそうなほど静かな事務所に、新垣のお喋りはかなり気分転換になつたので、智美はこのトークが嫌ではなかつた。パソコンへの単純な入力。更正会社であるので得意先からの電話もほとんどない。かかつてきた！と思えば営業部の植木が眠そうな声で、

「毎度～あれ？誰にかけたんやつたつけ？」

とズッコケた事を言うので調子が狂うくらいのものだつた。お密さまも滅多に来ない。だから、事務所と言えども活気がなく常に静寂を保つっていた。それだけに社長の独り言が事務所中に洩れ聞こえる

のだった。普通の会社であれば、社長室などいうものがあつて、秘書などつけてももらえるのである。倒産した時、智美はまだこの会社で働いていなかつた。しかし、倒産前の先代の社長は、今の大坂事務所にやたら女子社員を採用していた……という。そんなに人数も必要としないにも関わらず、自分好みのお水系の派手なお姉ちゃんが所狭しといたらしい。赤く塗つた長い爪は、文字を書かせても解読不明、パソコン入力を依頼すると、

「爪が割れるから無理！」と言つて髪の毛を赤い爪に巻きつけていた。その時まだ営業にいた丸山は、

「あれは酷かつた。あんな計画性ない事してるとから倒産したんや。」と言つていた。結局、その一代目だつた坊ちゃん社長は失脚して、会社更正法が適用されると同時に大手商社から連れて来られたのが今の社長だつた。しかし、国際電話などにも流暢に応える語学力を持つこの社長に、息苦しい空気の工場現場など合ひはずもなかつた。

現場の者は、

「社長の姿現場で、見た事ないわ。」

とこうくらゐ事務所に張り付いていた。社長室がないため、社長の言動は事務所の社員に筒抜けのようによく見えた。新聞を読んでいるか、パソコンを見ているのが一日の主な仕事だ。どう見ても忙しそうには見えなかつた。社長とはそういうものかも知れない……と智美にもわかつていたが、たまには現場の人達に、

「ご苦労さまだね。」

と一聲かけてあげたら、みんなもモチベーションが上がるのに……と残念に思うのだった。

雪の舞つ寒い日の午後。いつもにも増して体が動かなかつた。寒さで体が固まつてしまつてゐる。その上、会議でもあつて事務所にお偉い方々が一斉にいなくなる事もなく、事務所は相変わらずの静

寂を保ちながら、何の代わり映えもしない業務に向かっているだけだった。新垣は退屈そうに欠伸をしながら鳴った電話に、

「俺が取る、俺が取る！」と叫び、いの一番に受話器へと手を伸ばすのだった。「おう、毎度！…どうや？そつちは雪降つてるか？俺の家の前は雪だらけやから、今日はスキー板履いて滑つてきたぞ。」

得意のジョークに智美は微笑んだ。少しは静寂が崩される事に安堵感を抱く事が出来た。新垣の仕事は誰が見ても余裕があった。だから、電話で仕事の話をするまでに10分は世間話や自分のジョークを演説するのだった。その上頭の回転の早さを生かして、トークには必ずオチがあった。一人漫才でもやっているような話術には智美はいつも感心させられる。だから新垣の周りはつねに笑いで溢れていた。仕事をあまりしていない事は誰しもわかつていたが、それを変えさせようとする者はいない。ここだけは、時間がゆっくり流れているようだった。智美は現場で働いている人達の事を想つた。

「事務所は部屋も暖かくて、冗談言つても何も注意されないけど、現場はどれほど寒いだろう？しかも空気も悪いから、大変だろうな…あの環境で、生産量を上げろ！と言われてもこんなお氣楽な姿見たら、やる気も失せるだろうな。」

新垣のトークを左方向から聞きながら、ぼんやりと入力作業をしていた。するといつもの口調で、

「毎度。」

と大木が入ってきた。

「こつちは寒いなあ。」大木が来るという事は、オーディションがある事を示唆していた。

「大木さん、今日も面接ですか？」

静江の質問に、大木は少し不機嫌になつた。

「この前面接した子を採用しようと思つて手続きしてんけど、直前になつて辞退されて…せやからまた1からやり直しですわ。」

こんな会話も珍しくはない。何もこれが初めてではなかつたからだ。わざわざ大阪からオーディションのためだけに来たのに、それ自体

をキャンセルされた事もある。約束の時間になつても現れない面接予定者に待ちぼうけをくわされて、何もせずに大阪に戻つて行つた事もあつた。作業服に名前の刺繡を入れて用意したにも関わらず、辞退された事もあつたつけ… そう言えれば、採用して3時間でヘルメットを投げつけて辞めた者もいたなあ… 仕事とは言え、大木も懲りずによく来るもんだとみんな呆れていた。何故そんな事が何度も繰り返されるのか? 元の原因を追求していない限り改善される余地はない。その原因が、智美はなんとなく分かるような気がした。事務所の中の気楽な様子、大阪事務所の無駄な存在、不満を解消してあげられる能力のない上司達… それらが全て悪い方向に働いて、モノ作りをしている現場作業員のモチベーションを下げているのは、製品のクレームの多さでもわかる事だ。「辞めるばかりで入つてこないんじゃ、マジでヤバくないですか?」

静江が小声で聞いてきた。「更正会社の間は大丈夫やと思うよ。でも、借金返済した後はどうかな? って言つか、このままじゃ作る人がいなくなっちゃうよね。」

智美にとつても、会社の倒産は好ましいものではなかつた。この年齢で正社員として採用してくれる企業がない事くらい、智美自身痛いほど分かつっていた。仕事は単純過ぎて面白くなかったが、一応事務職なので体力は使わなくてすむ。今は大学を卒業したばかりの若い女性だつて採つてはもらえない。女子従業員は人材派遣で賄う企業が大半を占めている。そんな中この会社は、正社員としてたいした能力を求められる事もない。気遣いしない状態で、雇つて貰えている事だけでも有り難かつた。だから、2回目の倒産は避けてもらいたい… というのが本音である。でも、どれほど悪い噂がたつてゐるのか、不安だつた。若い従業員の友達の間では、

「あの会社はやめておいた方がいい。やり甲斐ないし、しんどい仕事のわりに給料は安い!」

と広まつてゐると言う。それは、入社しても辞めて行つた若い社員達がどれほど多いか… という事を物語つていた。そういう者達から

の噂がネズミ講のように広がり、今やその噂を封じ込める事など不可能なのだから。

智美があれこれ考えていると、事務所にオーディションを受けに来たらしい若者が立っていた。

「一、こんにちは。2時から面接の約束だったのですが、大木課長はいらっしゃいますか？」

総務の静江が素早く立ち上がり、事務所にある仕切りの中にある椅子に案内した。仕切つてあるだけなので、話しての内容が全て聞こえる。その大木の質問にはみんな笑っていた。企業の面接で聞く質問ではなかつた。何故なら人権にせしむるような家族の事を事細かく聞いたり、卒業している学校のレベルを必要以上にこだわつていたからだ。この前は、

「家に風呂あるん？」

と聞いていたので、千佳と桃子から猛烈に批判されていた。ただ、大学を卒業していない大木は、高学歴者には相当コンプレックスを持つてゐるようだつた。だから、大卒の者には決してそのような失礼な質問をする事はないのだ。しかし、その差別こそがみんなから不信に思われてゐる事を大木はわかつてなかつた。失礼な面接に拍車をかけているのが、余計に良い人材が入つてこない理由にもなつていた。今回のオーディションも何か笑える質問が飛び出しそうな事は、智美にも予測出来た。なにしろ、見た目でも、青白い顔をして華奢な体型は、間違いなくあの質問をされる事は事務所にいる者なら誰にでもわかるだろう。

オーディションが始まるや否や、大木の口から

「自分、線細いなあ）。体重何kgあるん？」

この質問に静江は智美と目を合わせ、またか…と呆れた顔をしていた。千佳と桃子も智美の方を見て、

「ほら、やつぱりね。」

と笑いを堪えていたので、軽く頷いた。聞き耳を立てて、更にオーディションの様子に集中した。面接に来たか細い子は、消え入るよ

うな小さな声で、

「36Kgです……。」

と申し訳なさそうに答えた。すかさず大木は、「うちの製品は一袋25Kg入りやけど自分の体重とあんまり変わらへんなあ。そんなんで持てるん?」

その声には明らかに見下した様子が伺えた。

「あつ……はい。おそらく。」

と自信なさげに答えると、大木は笑い出しながら、

「おそらく……って自分、そんないい加減な事言つてもらたら困るわ。今から現場に行くから、持つてもうわ。ヘルメット被つてや。」

そう言つと、直接に来た子を引き連れて、現場へと消えて行つた。

「どうやら、オーディション場所を現場に変えたみたいやね。」

智美が静江に言つと、

「大木さんつて人を見下して本当に嫌な人ですね。」と綺麗な顔をしかめながら言つた。

「その通り。あれでは悪い噂が立つても仕方ないわ。」

智美は、やる気のない暗い気分をより闇の中に突き落とされたような気持ちで入力作業を続けた。

それから数日経つて、前にオーディションを受けた細い身体の若者が入社してきた。線が太かるうが細かろうが、来る者を拒まないのがこの会社のオーディションだ。人をより好みしている場合ではなかつた。何しろ入社してもすぐに辞めてしまつて、大木は再びオーディションに来ないといけない羽目になるのだから。正直、智美もあの華奢な若者が長続きするのは難しいだろうなと思つた。現場の作業はかなり重労働だつたし、環境の悪さから臭いに耐えられない人も多かつた。智美よりもはるかに軽い体重の彼が、そんな過酷な

労働に耐えるのは、新垣に

「一時間黙つていろ」と言うのと同じくらい困難な事だろ？

「作業服のズボン、73cmでも大きいんですって。」

静江は新しい作業衣を準備をしながら、そう話してくれた。  
現場に行くと、真新しい作業衣にがどこか大きく感じられる若者が、  
25kgの袋を重そうに運んでいた。袖口から見えている細い手首  
は、木の枝のようだつた。智美は、その姿を見ていて手伝つてあげ  
たい衝動にかられた。歩きながら見ていると、小枝君の方から

「こんにちは。」

と会釈しながら挨拶をしてきた。現場の人々が挨拶してくるのに慣れ  
ていな智美は、少々驚いた。が、すぐに、

「こんにちは。慣れないから重くて大変じゃない？」と声をかけた。

「いえ。大丈夫です。」

「そう。あまり最初から飛ばしすぎると疲れるから、無理しないよ  
うにね。」

智美の言葉に小枝君は、

「はい。ありがとうございます。」

と再び深々と頭を下げた。なんだか、久しぶりに普通の「ミコニケ  
ーションが取れて、とても新鮮な印象を受けた。彼もそのうち会社  
の空氣に汚染されるように、このフレッシュも失われていくのだ  
らうなあ。と考えながら智美は手を挙げて、その場を立ち去つた。  
休憩室は相変わらずの満員御礼だつた。今日も煙草の煙が渦巻いて  
いる。書類を置いて立ち去る時に、ふと目に止まつたものがあつた。  
有給休暇の届けが山のように出でていた。日付を見ると2月11日ば  
かりだつた。祭日が出勤のせいもあって、旗日には必ず誰かは休む  
というのは常だつた。しかし、これだけの人数が休むとなると、半  
分の人数で現場を動かさなければならない事になる。機械を停めず  
に納期に間に合つ生産をする事が出来るのだろうか？智美は、丸山  
の愚痴を言つしゃがれた声が聞こえるような気がした。

しばらく平穏な日が続いていたが、品質保証課の若者が退職を希望してきた。今や辞めるのは製造現場だけではなかつた。各部署の若者が先をこぞつて退職を希望していく。その事が何を意味しているのかを上層部はわかつているのだろうか？今の状態は、会社の人口ピラミッドに例えるとカクテルグラス型だつた。20代、30代が1番上の定年間際の人達を細々と支えている。しかし、その支えの部分がどんどん減つていつて、風前の燭となつていた。若者が辞めるのを受けて、早速人員募集の広告が出された。この会社は年中募集の広告が掲載されていたので、その事が逆に敬遠されていた。今回は品質保証課という事もあつて、

『幹部候補生募集！』と大々的に宣伝していた。それがまた、今働いている従業員の反感を買うはめになり、モチベーションは下がる一方だつた。そして直ぐさま生産量に反映された。休憩室は益々満員で、現場の機械には人がいなくなつた。そんな事をしていても注意する上司は不在なのだ。なぜなら、それは全て会社のせいだと決めつけていたのだから。

### 「毎度」

いつもの挨拶で大木がやつて來た。今回は『幹部候補生』の文字に躍らされて、珍しくオーディション希望者が募つてきたのだ。しかも一人もだ。大木は張り切つてか、オーディションを始めるまでに事務所の中をうろうろと歩き回つていた。別に用事や仕事があるわけでもないのに、ただあつちへ行つたりこつちに来たりと忙しそうに歩いていた。千佳と桃子はそれが気になつて仕方ないらしく、疎ましそうな顔で仕事をしていた。智美が気付いている事を静江も気付いているようで、智美の方に大きな瞳をより一層見開いて見せた。

一人目がやつて来た。ちょっとメタボな中年親父だった。履歴書を見た大木からの質問攻めが聞こえてきた。

「48歳ということですが、結婚はされますか？」

流石に自分よりは年上という事もあって、丁寧な言い方で始まった。「していたのですが、今は独り身です。」

「ふう～ん。そうですか。子供は？」

「息子が一人います。」

「何年前に離婚されましたか？」

「はあ～、5年くらいになりますかねえ。」

「家事は全部一人でされますの？会社に来る前に家事してては、しんどいんと違いますか？」

これだけ聞いただけでも、智美的不快指數は上昇していた。しかし、失礼な質問はこれで終わらなかつた。「職歴見せてもらつただけでも、えらい転々としてるようですが…えー、この会社はなんで辞めたん？」

中年の親父は聞かれた事に真面目に忠実に答えていた。

「その前に働いていたこの会社、これは何してる会社？従業員は何人くらいいたん？」

大木の口調がだんだんため口になつていく。職歴の辞めた理由とどんな会社で何をしていたかを一通り聞くだけで一時間近くになろうとしていた。揚げ句の果てには、

「今回うちちは幹部になつていただける人を募集しますので、あなたのように色々と仕事変わられてたら、長続きしないでしよう。パソコンも出来ないという事ですので、うちではちょっと難しいんと違うかなあ～」

と珍しく断つていた。きっと後にも面接に来るので大きく出たに違いない。根掘り葉掘り聞かれて断られた親父の背中を見送りながら、とても気の毒な思いで溢れてきた。

しばらくしてから、一人目のオーディション希望者が受けに来た。歳は二十歳過ぎの若者だ。金髪にピアスを開けていてどことなく態

度がふてぶてしかつた。

「こんなにちは」

見た目とはうらはらに、きちんととした挨拶をしてきたその若者に対して大木は、いきなり

「ハア～ツ」

と溜息をついた。これには智美も想定外だつたので、もしかしたら、大木は若者に殴られるのではないかと心配した。履歴書を見た大木は再び、溜息をついた。どういう事だろう?事務所の誰もが、どんな質問をされるのか聞き耳を立てた。「自分、高校中退してるんやなあ～。っていう事は中卒といつ事やな。」

この時、智美は大木の口の横のホクロが歪んだのが見えるようだつた。

「つちは仕上がり数量を数えてもらわなあかんねんけど、計算出来るん?」

### 第3話 セクシャルハラスメント

今年もまたホワイトデーがやってきた。毎年そうだが、この日は女子従業員にとっては最高に幸せな日でもあった。義理チョコを申し訳程度に配つただけで、たくさんのお返しが待つていたからだ。智美もホワイトデーは一年の内で、最もプレゼントをもらえる日なので大好きだった。

「誕生日でもクリスマスでもこんなにプレゼントはもらえへんわ。いつも女の子達の間では、そんな会話をしていた。今年の社長からのお返しは何だろ？ 美味しいお菓子はあるかな？ なんていう楽しみと期待で、この日だけは仕事で上がらないテンションをアゲアゲで出社するのだった。朝現場へと向かうと、

「智美ちゃん、この前はおおきに。これお返しや。」と言つて美味しそうなお菓子の包みが差し出される。「わあ～。ありがとうございます。」

智美は朝から幸せいっぱいの気分に浸っていた。ホワイトデーの後はしばらくの間お菓子を買わなくとも良かつたので、とても助かった。しかも、みんなは美味しい物や珍しい物を贈つてくれた。インターネットでわざわざ取り寄せてくれた物もあつた。高級な香水や、マグカップもあつた。また、洒落か悪戯か下着をくれる人もいた。「ねえ、ねえ～上野さんからのお返しはパンティやつたよ！ しかも、レースのスケスケでちょっと恥ずかしいねんけど。」

「えつ！ 智美さんのそんなセクシーのだつたんですか？ 私のはくまさんと風船でしたよ。かわいかつたんですけどね。やっぱり大人の女性と区別されたのかな？」

二十歳過ぎの淑子がそんな事を言うので、お昼休みの食堂ではホワイトデーのお返しの話で盛り上がつていた。工場長からのお菓子は美味しかつたとか、松村さんは去年お返しを忘れていて、ホワイトデーの次の日に、慌てて買って持つて来たとか、幸せな一時をキヤ

ツキヤツ言いながら話していた。

午後からは、眠い体に鞭打つて稼動率の計算をしていた。今日は昼一番から会議があつたので、課長も次長も全てお偉い方々は会議室の中だつた。智美は気楽な気分で一人、製造現場の事務所で仕事をしていた。欠伸や肩の運動をして気分転換をしていると、梅本が部屋に入つて來た。

「ああ、梅本さん。今日は課長いらつしゃらないですよ。みんな会議ですから。」

智美の言葉に梅本は、

「せやから來たんや。智美ちゃんと一入つきりになる思つてな。チャンスやなあ～」

「ハハハ…梅本さん何がチャンスなんですか？社交辞令にしても可笑し過ぎるじやないですか。」

智美は、眠氣を飛ばすように笑つた。上司がいない事もあって少し気が緩んでいたせいか、誰に遠慮もなく大声で笑つていた。すると梅本は、

「自分、かわいらしい顔してるなあ。ワシ、智美ちゃんみたいな子、好みやねん。」

と少し真面目な顔で言つてきたので、

「またまた冗談言つて～！からかわないで下さ～よ。この会社には若くてかわいらしい子がいっぱいいるじやないですか！しかも、梅本さんは私の父と歳も変わらないでしょ？」

「ほんまの事やで。若いとか関係なく、ワシは智美ちゃんが一番やねん。」

「それはどうも。そんな事言つて下さるのは梅本さんだけです。でも、褒めてもらつても何も出ませんけどね。」

智美は、冗談っぽく言つた。すると梅本は、声を潜めて智美に顔を近づけながら聞いてきた。

「今日の昼休み、女の子で話しどつたやうり？上野から何もろたんや？」

智美はギョッとした。昼休み騒いでいた話を梅本は聞いていたのだ。

「あーっ、あれね。ホワイトデーに重宝な物にもらつた…って話してただけです。」

「パンティはそんねん重宝な物か？」

梅本が、内容までしつかりと聞いていたのには驚いた。しかも顔を近づけながら言つてきたので、智美は少し気持ち悪さを感じた。しかし、ここで恥ずかしがるのは梅本の思つ壇になるのではないか？と考え、毅然とした態度で答えた。

「そりゃあそうでしょー！パンティはかない人はいないでしょ？何を頂くにしても、贈つてくれる人の気持ちは大切にしないと…」

「どんなパンティや？」

智美の言葉を遮るように梅本が聞いてきた。

「なんでも、透けてるそつやないか。」

「そこまでこ存じならば、私に敢えて聞く必要ないでしょ？」

「そのパンティ、はいてみたんか？なあ、どうやつた？」

「答える義務はありません。」

「ここまで言われると、智美はかなり不愉快になつてきた。ただ、大声で叱るのも大人げない気がしたので、無視する事に決めた。

「会社へはいて来てくれへんか？」

「……。」

「はいてきたら、スカート幕つて見せてくれたええわ。」

「……。」

「ワシ、気になつて寝られへんよつてに、はいて来たら見せてや。」

「……。」

「なあ、ええなあ？」

このあたりで智美の憤りは、最高潮に達した。無視してるのは嫌がつていてるという事を梅本はわかっていない。自分の都合のいいように解釈してるので、呆れ果てた。怖い顔をしながら智美は梅本の顔を見ずに、ぶつきらぼうに口をきいた。

「あのね、さつきから言いたいように言つてくれてますけど、私は

梅本さんにパンティを見せるつもりは毛頭ありません。気になつて寝られないのはそつちの勝手ですから、今度は棺桶に両足突っ込んだらいかがですか?」

不快な気持ちをここぞとばかりに表したつもりだった。少々失礼な事を言つたかな?とためらわれたが、梅本はこれくらい言わないと気が付いてくれないだろうと考えた。

「自分は棺桶が好きやなあ。両足突つ込んだら出られへんやないか。出る時に、ワシの手を引いてくれるか?」

「あの~。棺桶ではなくて、私は梅本さんにパンティを見せるのが嫌だと言つてるんです!」

「嫌だ嫌だも好きのうひ…つて言ひやひ?ほんまは喜んでるくせに。」

「よくもまあーこんなにポジティブに考えられるもんだと、智美は呆れて言葉を返すのも疲れてきた。

「違います。」

「それやつたら、上野にもろたパンティをくれ。」

「はつ?そんな事は出来ません。だいたい贈つてくれた上野さんに失礼でしょ?」

「ワシが、代わりのパンティ買つてやるやないか。」

「結構です。早く仕事に戻つて下さい。」

「自分、喜んでるくせに…。そんねん早づ帰さんでもええやろ?なあ~」

梅本が一段と近付いてきたので、智美は流石にその場にいるのが怖くなり、思わず立ち上がった。そこへ現場を手伝う斎木が、事務所へ上がってきた。

「梅ちゃん、何処へ行つたかと思つたら、こんな所でさぼつて。」

「斎木君、気がきかへんなあ~ワシと智美ちゃんのデートを邪魔せんといってくれるか!」

智美は斎木に向かつて大きく頭を振つた。

「梅ちゃん、何眠たい事言つてるねん。選別がようけあつて困つて

るねん。さあ、行くで。」

背が高くて体格の良い斎木は、座っていた梅本を強引に連れて行つてくれた。

「ありがとう。」

智美は声を出さずに口を動かして、斎木に頭を下げた。

それからしばらくなつた。あれは単なる冗談だつたのだ…と智美は思つた。昼休みに女の子達がパンティがどうだこうだと言つてゐるのを聞いて、その時だけ興味が湧いたのだろう。だいたい定年前のおじいさんが、そこまでパンティに固執するのは考え難かつた。確かに現在梅本は離婚をしていて独身だつた。しかし、梅本の子供は独立をして世帯も持つていて、孫の写真を大切そうに財布に入れていた。智美も何度か見せてもらつた事があるので、孫の成長に目を細める優しい祖父なのだと思つていたからだ。しかし、梅本のあの顔が近付いてきた時の雰囲気と漂つてきた口臭は、思い出しだけでも背筋が寒くなるのは否めなかつた。智美がいつも通りに現場へ仕上り表を配りに行くと、梅本が数人の現場作業員と休憩していた。みんなで話をしていたのでそのまま置いて、素早く出て行こうと足を早めた。すると、「智美ちゃん！ちょっと待つてや。」と呼び止められた。声の主は梅本だつた。

「ちょっと頼みがあるんや。」

一瞬、この前と同じ依頼がされるのでは…?と警戒したが、他にも人がいるので心配には及ばないだろうと思つた。

「なんでしょう?」

少しぶつきらぼうに聞いてみた。

「来週、息子の嫁が誕生日なんや。化粧品とか入れるやつ…あれ、何て言うんやつたかな?」

「化粧ポーチですか？」

「ああ、それそれ！その化粧ポーチとか言つのを買いに行こうと思  
うんやけど、ワシょうわからんよつて一緒に買ひに来てくれへん  
か？」「

智美の脳裏にこの前の近付いてきた顔と臭いが蘇った。絶対無理！  
と心中で叫んでいた。一人で買い物なんて、その姿を想像しただけでも気持ち暗く闇の底まで墜ちていきそうだ。

「あのお…。一人で行くのはちょっと困ります。私も仕事が終わってから買い物や家の用事もあって忙しいですから。」

「ワシ、なんぼでも仕事早う終わるよつてに、都合のええ日を言つてくれ。」

やはり、梅本は断つている事に気が付いていない。智美は少し考えた。  
犬井ヒロシのように…

嫌なエロオヤジに、After Fiveを無理矢理誘われた時の話やけど、その断り方として一通りあると思うねん。まずは後  
の仕事のしやすさを考慮して

「『メンなさい。私んち、夜間外出禁止だからデートできないの  
』

とカマトドぶつて申し訳なさそうに断るのか～それとも  
「何ぬかしてんねん！気持ち悪い。一生お願ひされても、デートは  
有り得へんわ！！！」

とドスをきかせて一度と言つ出せないくらいビビりさせて断るかは  
自由だああ～～～！！！After Five is Free  
dom じのネタが、フォークギターのメロディーと一緒に頭を駆け  
巡っていた。気持ち的には後者であった。しかし、まだ定年までは  
一緒の会社で仕事をしなければならない。ドスをきかせてビビるら  
せるのは梅本のみならず、他の現場の人達とも仕事をやりにくくす  
る恐れがあった。だからと言って、智美はぶりっ子する年齢をとう  
に過ぎていたし、キャラ的にも相当な無理があった。どうしよう?  
どうしよう?…返事に迷つていると、梅本が再び

「なあ～いつにしよう?」と言つてきた。

「私、これから先、ずっと先約があつて…凄く忙しいんです。予定が空くのはですね…」

智美は携帯電話を取り出し、スケジュールをチェックするふりをした。携帯をいじりながらも断るよい手段を模索していた。

「ああ、ここ三年は一日もあいてないです。三年も経つと梅本さん、会社におられないのでは?」

「はつはあ～ん。上手い言い方しよるな。携帯見せてみい。」

そう言つて、智美的手から乱暴に携帯を取り上げようと手をのばしてきた。が、智美的反応の方が早かつたので、せつと携帯を頭の上に上げて、

「個人情報がたくさんつまつてますから、お見せする事はできません。」

と背伸びをした。

「見せてみい。ちょっと、こっちへ。」

まだ梅本が手を伸ばしてきた。その恰好が骸骨が操り人形のように手をぶらんぶらんさせてる様子に似ていたので、智美は急に可笑しくなつて笑い出した。すると、他に休憩していた現場の人達も煙草の煙りを揺らせて大笑いしていた。

「ハハハ…梅ちゃんそのへんでやめとき。嫌がられてるやないか。そんな必死になつてる恰好見てたら面白う過ぎるわ。」

「そうや。そうや。もっと仕事に必死になつてやらなあかんわ。選別今日もようけきたで。」

そう言われた梅本は、今している動作を止めて、

「よおつ?」

と言つた。

「また、選別きたんかいな。お前ら、色々と余計な物入れた製品作るよつてにワシ忙しいやないか。」

と言いながら、再びよつこらしょと椅子に座つて煙草に火をつけた。その様子を見ていて、休憩室の中は大爆笑に包まれた。どうやら智

美の事は回線が切れたようだ。こうこうの性格が、みんなを

「梅ちゃんはしゃあないな～」

という気持ちにさせる。智美は、得な人だなあと感心するのと、なんとか忘れてくれた安心感からクスッと笑つて休憩室を出て行つた。次の日、智美的姿を見かけた梅本が、どこからともなく走つて來た。

「智美ちゃん歩くの早いな～。ワシ、必死で走つたよってに心臓止まるかと思つたわ。」

智美は、軽く笑つていたが、昨日の事を思い出したのではないか？といふ不安に陥つていた。

「あれ何やつたかな？け、け、化粧入れる物や。」  
やつぱりきたつ！

「化粧ポーチでしょ？」

「せや、それや。昨日頼んだ事何とかならへんか？智美ちゃんの分も買わせてもらひつかいに、一緒に来てくれへんか？」

「…………。」

「なあ、頼むわ。お願いやから頼むわ。」

老人が命ごいをするような憐れみを、全面的に押し出しながら梅本は手を合わせて頼んできた。その姿を見ていて、智美は無下に断るのは気の毒に思えてきた。しかし、一人で会社を終わつてから買い物を行くというのは絶対に避けたかった。そうだ！一人で行けばいい。

「梅本さん。もし良ければその化粧ポーチ、私に任せていただけませんか？私、会社が終わつてから買い物に行くついでに見繕つて購入してきますから。」

「よおつ？」

梅本はポカンと口を開けていた。どうやら智美的申し出の意味が理解出来てないらしい。

「だから、私が一人で化粧ポーチを見つけて買つてきますから、任せて下さい……って事ですよ。」

「ワシも一緒に行くわ。」「いいえ、梅本さんは選別がたくさんあって、自分の間は定時で帰れないでしょ？だから、私が買ってきますから。」

「せや、ワシ忙しいんやつたわ。」

「じゃあ、決まりですね！行けたら今日でも買い物に行きますので、また連絡しますね。」

早々に進めなければ、梅本の気持ちが変わるものではないかと焦ったので、智美は口早に話した。

「そしたら頼むわ。」

あれこれ考えて悩んでいたわりには、以外とあっさり言われたので智美は拍子抜けしたが、二人で行かなくても良い事にはホッとした。「ワシ、仕事してるので、どんな買うたかここへ連絡してくれ。」

「わかりました。私のセンスと趣味の良さで義理の娘さんに飛び切り良い化粧ポーチを探してきますからね。」

智美は我ながら上手い具合に事が進んだな…と安堵の気持ちで歩いていた。この後に起る、更なる災難など全く予想する事もなく…

智美は一人で買い物をするために、必死で定時に上がれるよう仕事を控らせた。万が一残業にでもなって梅本から、「ワシも終わつたから一緒に行こう…」

などと言わないようにするためにも、電卓をたたく指と書類を運ぶ足を早めた。その甲斐あって、見事に定時で仕事が終わった。

「よし！買い物に行きますか。」

智美は梅本から預かった一万円札と、買い終わつたら連絡する為の電話番号を持って店屋へと急いだ。

店と言つても、田舎町にはスーパーが名前ばかりの百貨店くらいし

かない。あまり品数がなく狭い百貨店に智美は寄る事にした。スーパーよりはプレゼント用の包装がしつかりしているからだ。婦人装飾の売り場には何点かの化粧ポーチが並んでいた。百貨店業界では一流のこの店でも、置いてある商品は名前の知れたブランド品だった。ポーチにはレースのフリルと程よいビーズであしらつた可愛い物があった。

「そう言えば、梅本さんのお嫁さんは、かなり若いって言つてたなあ。色はピンクがいいかな？白いのも可愛いなあ～」智美は、楽しみながら選んだ。人の物でも、もらつた時の喜んだ顔を想像しただけでもウキウキしてくる。智美は、ピンクのポーチを選んで精算を済ませた。

「あつ！ そうだ。梅本さんに連絡を入れる約束だつた。」

梅本から渡された携帯電話の番号にかけてみる。

「もしもし。」

梅本の気取つた声が聞こえた。いつもと違つ言い方に思わず吹き出しそうになつた。

「梅本さん！ 智美です。まだ、お仕事中ですか？」

「おお！ 智美ちゃんか。今忙しいってな、休憩室で一服してるとこや。」

「ハハハ…忙しいなら一服出来ないじゃないですか。」

「バレたか？ もう、丸ちゃんも帰つていやへんよつてにな、みんなで休憩してるんや。」

「えつ…もう課長いらつしやらないんですね？ そんなんですか…あつ、そつそつ！ 化粧ポーチ買いましたよ。」

「おう、すまんのあ～。ええ物あつたか？」

「はい。可愛いポーチを選びましたよ。息子さんの奥さん、多分喜んでくれると思います。」

「それは、おおきに。それで、自分の分も買つたんか？」

「いえ、やつぱり申し訳ないので、お嫁さんの分だけ買いました。」

「遠慮せんでええねん！ ワシが智美ちゃんに無理言つて行つてもら

つてゐるんや。お金もあこ田に渡してあるやろへ。

「でも…」

「足りんかったら出しておいてくれ。ワシ、明日払つてもうた分渡すよつてに。」

「いえ、充分いただいてるので足りない事はないのですけど…本当に良いのですか？」

「当たり前田のクラッカーやー遠慮せんと買いや。明日また、どんな物買つたか見せてくれたらええわ。」「あつがとうござります！では、お言葉に甘えて買わせていただきますね。明日持つていきますので、お楽しみに！」

「おう。必ず見せてや。」「了解でーす。」

電話の向こう側から、騒がしい笑い声が漏れ聞こえてきた。おそらく課長や管理職が全員帰つてしまつて、現場には誰もいない状態なのだろう。みんなが羽を伸ばして休憩している姿が見えるようだつた。しかし、智美はそんな事よりも、思いの他可愛い化粧ポーチをゲット出来た事で浮かれていた。梅本の気前良さには脱帽する。こう性格だから、仕事をしなくとも、嫌われる事なくやっていけるのかな?と思った。とにかく有り難い棚から牡丹餅に「よつしゃ!ラッキー」と小さくガツッポーズをして、再び婦人装飾品売り場へと戻るのだった。

明くる日、智美は余つたお釣りと化粧ポーチを持つて梅本のところへ行つた。朝一番から梅本は仕事をせずに椅子に座つて煙草をふかしていた。

「梅本さん、昨日はありがとうございました。これ、お釣りをお返ししておきますね。それと、お嫁さんへのプレゼントです。」「気にいったのあつたか?」

「ええ、早速使つてます。見て下さい。」

智美は昨日買つてきた物を差し出した。年齢を考慮して落ち着いた黒色、でもビーズをあしらつてあるのどどこか「ージャスなポーチだつた。

「これが化粧ポーチか。中に何入れるんや？」

「化粧品ですよ。ファンデーションとかリップとか…私はコンタクトレンズのケア用品も入れてますけどね。」

「はつはあ～ん。」

口をポカンと開けながら言つたので智美は面白くなつて、

「梅本さん、ファンデーションつてご存じなんですか？」

と聞いてみた。

「よつ！？」

「ほら、やつぱりわかつてない。カタカナになるとわからないんでしたよね？」智美は笑いながら続けた。「まあ、女性の七つ道具が入つてゐるつて事ですよ。」「見せてみい。」

と手を伸ばしてきたので、「ダメですよ。何と言つても秘密がいっぱい詰まつてますから、そう簡単にはお見せ出来ません。」「そんねん秘密がいつぱいなんか？」

「ええ、それはそれはとても男性にはお見せ出来ません。」

「自分、上手い事言うなあ～。」

一人で、思い切り笑つた。「本当にありがとうございます。私の分まで買つていただき…とても気についてます。」

「それは良かつたわ。ワシな、智美ちゃんが喜んでる顔見るの、好きやねん。ほんまに自分は嬉しそうな顔するなあ。」

「だつて本当に嬉しいですもの。きつとお嫁さんも喜んでくれますよ。」

「せやろか？週末大阪に帰るよつてに、息子の嫁さんに渡しておくれわ。」

「はい。是非感想を聞いておいて下さい。私も見立てた手前、気になりますからね。」

「よつしゃ。任さんかい。」

梅本の『任さんかい』ほどあてにならなく、任せられないものはない。それが、「梅ちゃんは、しゃあないな～」と言われる所以だ。製品の仕上がりが、いつも計算出来なくて、智美のところへ「これ、なんぼになるんや。足してくれ。」と来る梅本。

「世話のかかるおじさんだなあ。」

と思いつつも、気前のいい梅本はどこか憎めないとこりがあつた。この間は、こそっと事務所のドアを半分だけ開けて、智美が気付くと手招きして呼び出した。席を立つて梅本の方に行くと、いきなり目薬を手渡された。

「何ですか？ これ…」

と不思議がる智美に、梅本は近くにあつたソファーに横たわり、上向きに寝そべると目をパッチリ開けながら、

「田薬注してくれ。」

と言つのだった。智美は驚いた後ですぐに呆れてしまつた。よくも厚かましい申し出をいとも当たり前のように言えたものだ。

「あのね、ここは学校の保健室ではないんです。だいたい目薬なんて、自分で注した方が加減がわかつていいじゃないですか！」

「あかん、あかん。ワシ自分で注すの怖いねん。ちょっと悪いけど注してくれるか？」

智美は溜息をつきたい気分を必死に抑えるのだった。

「駄々をこねる子供みたいですね。」

智美はあらためて梅本を見た。上向きに寝そべって、目だけをパッチリ開いたままの状態で静止している姿は、それだけでも充分滑稽だつた。

「早う。目が乾燥してくるやないか！ 早う注してくれ。」

智美は急に可笑しくなつて笑いが込み上げてきた。でも、至つて真面目な梅本をあからさまに笑うのは失礼な気がして、必死で堪えた。細い両腕を大の字に広げてるので、骸骨がソファーに垂れかかっているようにも見えた。

「わかりましたから…。絶対に動かないで下さこよ。」

智美は恐る恐る近付いた。急に起き上がりて顔を近付けられはないかと警戒しながら覗き込んだ。梅本はまだ目を大きく見開いていた。顔を見ると再び笑いが込み上げてきた。目薬を少し高い所から垂らした。すると、狙いは外れて梅本の眉毛の上に落ちてしまつた。「智美ちゃん、殺生やわ。ワシの目はそんねん上と違うで！」そんな事を言われたものだから、智美は堪えていた可笑しさを一気に爆発させてしまった。

「アハハハハハ…駄目です。梅本さん面白すぎますよ。これ以上は無理！やつぱり自分でやつて下さい。」

「なんや、冷たいなあー。ワシ、事務所までわざわざ来たのに…言う事聞いてくれへんのか？」

梅本は拗ねたように口を尖らせていった。

「いえいえ、別に嫌とかいうんじやないですよ。でも、私は下手くそなので無理みたいです。ゴメンなさい。あつー！そつそつ。岩崎部長なら上手くやってくれるんじやないですか？私、呼んで来ます。」智美は事務所に走って行こうとした。すると梅本は急に起き上がりて、

「かまへん、かまへん。ワシ自分で注すよってこ、呼ばんでええわ！」

と慌てて言つてきた。

「なんだ、最初からそうすればいいのに…と智美は思つたが、みんなから煙たがられている岩崎の名前を出したのは、我ながらナイスな対応だつたと満悦した。何しろ岩崎は『仏頂面した部長』と言われるほどに愛想の悪い顔付きをしていたからだ。このようなやり取りが日常茶飯事にあつたので、梅本が手のかかる事は珍しい事ではない。お年寄りを大切にする事をポリシーとしている智美にとつては、少々嫌な事でもやつてあげなければ…という心情が働くのだ。

「任さんかい！」

と意気揚々と作業場に向かう梅本を見送りながら、智美は買つても

らつたポーチを携えて事務所に戻るのだった。

キンコーンカーン「やつと昼休み！お腹空いた～」

チャイムが鳴ると、智美はすぐに女子従業員が集まる休憩室へと向かう。するとチャイムが鳴り終わらないうちに智美的携帯電話が鳴った。携帯の着信表示を見ると、登録されてない番号だつた。智美は間違い電話だつうと思つて出なかつた。しばらく鳴つた後に電話の着信音が止んだので、たほど氣にも留めていなかつた。

「今日は何のお菓子を食べようかな？昨日、中嶋君からもらつたチョコパイにしようつと…」

ジユースも毎日のよつこじ馳走してもらつていたが、昼休みに食べるお菓子も毎日切れる事はなかつた。パチンコ好きなおじ様から勝つた景品をもらつたり、毎朝智美のところへお菓子を持つて来てくれる中嶋もいた。その上月曜日ともなると、誰かしら旅行に行つたお土産を買つて来てくれたので、事務所の冷蔵庫はお菓子が賑やかに並んでいた。一人では到底食べ切れなお菓子を、昼休みに女子達でお喋りしながら食べる時間が会社にいる中で一番楽しいひと時であつた。会社の環境も上司達にも決して恵まれてはいなかつたが、食べ物だけには福がついていた。みんなとキャッキャッとお喋りしながら笑つていると、再び智美的携帯が鳴つた。番号は登録してない相手からだ。先程と同じ番号のようだつた。智美は警戒しながら、出てみる事にした。

「もしもし…？」

「はつはあ～ん。これで番号わかつたぞ。」

「梅本さん？どうして…」と言つたとたん、智美はハッ！…と気付いた。あの時だ。ポーチを購入した後に梅本に電話をかけたではないか。智美はしまつた（^\_\_^）と思つたが後の祭りだ。

「ワシの電話触つてたらな、着信が出てきたんや。そしたら智美ち

やんこの前電話くれたよつて、ここの番号違うかな?と思つてかけてみたんや。自分さつき電話に出やくんかつたやろ?」

「あら、そうでした? 気付かなくて…」

智美は悪い予感で会話どころではなかつた。

「番号を知られてしまつた。よりによつて梅本に…どうしよう?」頭の中は憂鬱でいっぱいだ。梅本は次々と話しかけてくる。きっとこれからは、始終かかつてくるだろ。楽しいはずの昼休みが一気に暗い気分になつてしまつた。反省していた。迂闊な自分の言動を恨んで、自身を責めていた。昼休み、みんなと話しているから…と言つて、ようやく電話を切つてもらつた。午後からの仕事は集中出来なかつた。現場で梅本に会つと、首から携帯電話を提げていた。そして嬉しそうに携帯を持つて、左右に振つて見せた。智美は苦笑しながら、さつさと現場を去つた。着信拒否をするのはたやすい事だ。しかし、毎日顔を合わせる上に智美には色々と気前よく買つてくれる梅本に対して、それはあまりに失礼なように思えて気が進まなかつた。

「何かよい方法はないかな? 梅本さんも氣を悪くしないで、電話をかけてこなくなる方法が…」

その日の夜もちゃつかり梅本から電話がかかってきた。

「おう! 智美ちゃんか? ワシや。今風呂に入りながら電話してゐるねん。風呂入つて気持ちよくなつてきたら、智美ちゃんの声聞きたなつてなあ~今家に一人か?」

「はい。」

「そうか、それなら話は早いわ。あのな、ワシ思い切つて言つナビ、智美ちゃんの事愛してるで~ハハハ。」

少し照れたような言い方だつたが、決してかわいいものではない。むしろ、骸骨が湯舟に漫かつて電話をかけてきている姿を想像するし、背筋に寒気が走つた。「そんな事言われても困ります。私は会社の仲間としか思つてません。」

「なんでや? 智美ちゃんには、ワシ想へしてゐやないか。他の女の

子にはあんねん色々と買つてあげてないで。今度一回ヨーヨーしてや。

頼むわ。」

「だから、予定が詰まつてお断りしたでしょ？」

「そんな冷たい事言わんといてえな。一回だけええから、なつ？」

「無理です。」

「なんでや？」

「会社でのお仕事なら快く受けます。でもそれ以上の事は迷惑なん

です。電話も困ります。用事があれば会社でお願いしますよ。」

「そんなん言わんと。あつ、石鹼で手が滑るよつてにまたかけるわ。  
愛してるで～。」

「もう、かけてこなくて結構ですから…」

「ブーツ、ブーツ、ブーツ…最後の言葉は聞いてないようだ。智美は  
益々落ち込んでいた。あれ以上ハツキリ言うのは智美には出来なか  
つた。上手く伝えられない自分に腹が立つ。智美は会社に行くのが  
今まで以上に憂鬱に感じた。

次の日、智美は極力梅本と顔を合わせるのを避けた。書類を配るう  
とする休憩室に梅本がいると、素通りして、時間をおいてから再び  
配りに来た。現場の遙か向こうに梅本がいると、その道はやめて別  
のルートを通りるようにした。

「なんで私は、こんなに気を遣つているんだろう?」智美は、薄暗  
い現場を歩きながら思つた。

それからじばらぐの間、梅本はたいした用事もないのに、度々智美  
に電話をかけてきた。無視して取らない時もあつたが、智美自身も  
どうしてよいか煮え切らない自分に苛立ちを感じていた。じばら

く取つていらない日が続いた朝、智美が製造課の事務所で仕事をしていると、携帯が鳴った。番号を見ると、登録してない梅本からのものだとハツキリわかつた。なかなか出ない智美に、隣で仕事をしていた斎木が、

「電話出ないんですか？」と聞いてきた。斎木は事務をしながら現場も手伝う、将来の幹部候補生の一人であつた。大学を卒業してまだ一年しか経つてなかつたが、なかなか常識をわきまえている若者だと、智美も一目置いていた。斎木に聞かれて戸惑つていた時、智美はひらめいた。

「あつ、ちょっと事情があつて…あのね、斎木君。何も聞かんとの電話に出てくれない？『もしもし』だけでいいから…何か言つてきたら、『どちらさんですか？』って言つて！お願い！」

智美は切羽詰まつた表情で口早に言つた。斎木は少し事情を察してくれたようで、何も言わずに智美の手から携帯を取ると、

「もしもし」

と言つてくれた。しばらく何も話さないで黙つていたが、数秒経つた後

「はい。もう繋がつてないから大丈夫です。」

と言つて携帯を渡してくれた。智美は完全に切れているか画面を確認して、初めてホツとした。

「変な事頼んでゴメン。助かつたわ。ありがとうございました、で、電話の相手は何か言つてた？」

「ああ…慌てた様子で、『わ、わ、私、間違いました』って言つてましたよ。」

「へえ…、そんなに慌ててたの？」

「はい。慌ててそう言つたと思ったらすぐに切れました。」

電話口に男性が出て、梅本がどんなにびっくりした事だろう。想像すると、智美は急に可笑しなつて、大きく口を開けて笑つた。

「迷惑電話ですか？」

「そう。迷惑な上にしつこい電話やつてん。多分これでかかつてこ

な」と思つけど、仕上げにもう一押ししておかないとね。」

そつと悪戯っぽく笑つた。斎木もその顔が面白かった様子で、一緒に笑つた。

智美は、梅本が作業している前を堂々と歩いた。その姿を見つけた梅本が、すぐさま走つて來た。

「智美ちゃん、自分全然携帯に出てくれへんやないか。どないつてるねん！」

「えつ！携帯？最近梅本さんからはかかつてきてないですよ。」

「ワシ、今日の朝もかけたんや。そしたらおっさんが出よつたがな。ですよ。ほりつ。」

智美は前と同じ携帯を、さも新しく買った携帯のように揺らせながら見せてみた。

「なんや。新しい携帯になつたんか。はつはあ～ん。それでつながらへんかつた訳や！」

「ええ。じつちの新しい方が使い勝手が良くて。」

「新しい番号、教えてくれ。」

「ゴメンなさいね。梅本さん。これは家族との連絡手段として買つたものなので、他人には教えられないんです。」用の時は会社で直接伺いますから、申し訳ありませんね。」

「年寄りをいじめるんか？」

梅本はイジケてそっぽ向いた。

「いじめるなんて、とんでもない！梅本さんが計算出来ない時はいつもだつてお助けしますよ。遠慮しないで聞いて下さい。でも、プライベートは会社とは別にしたいんです。わかつてくれますよね。」

智美は小さい子供を諭すように、ゆつくりと丁寧に話しかけた。梅本は何も言わずに作業に戻つた。

その日、梅本は早退をしたようだ。それから三日間、無断欠勤をした。仕事がお世辞にも出来るとは言えない梅本だったが、無断欠勤して選別作業が遅れている事は、課長である丸山の怒りに触っていた。智美は電話の番号を教えなかつた事と関係あるかな?と少し心配になつたが、取り越し苦労だろう…と自分に言い聞かせていた。休み出してから四日目に、梅本は精彩を欠いた顔付きで出社してきた。骸骨だった風貌が、余計に瘦せこけて貧相に見えた。：多分風邪でもこじらせていたのだろう…と智美は思つた。忙しい朝は、梅本に声をかける暇もないほどだった。バタバタ走り回つていると、上手い具合に梅本が向こうから歩いて来た。

「梅本さん！隨分お休みをされてましたけど、体調でも悪かつたのですか？」

智美の問い掛けに梅本は聞こえなかつたように顔を背けて、足を止める事もなく行つてしまつた。いつもなら、嘘か本当か理解し難い冗談で言い訳をしてくるのに、今日は様子が違う。でも、声をかけたのに無視をする梅本の態度に智美は立腹した。

「そつちがそういう態度なら、敢えて話しかけませんよーだ。」

智美はそれからは梅本がいても空気のように扱つた。休憩室で梅本が何人かの現場の人達と休憩していくも、他の人と一言一言話していくに出で行つた。現場で出会つても梅本が顔を見てこないので、挨拶だけして足早に歩いて行つた。何日かそういう態度で接した。梅本の夢を見ているような眠たい冗談を聞けないのは、智美にとても寂しい事ではあつた。しかし、しかとをしてくる梅本に、話してもうおうと機嫌を取るほどの相手でもない。智美には梅本と話さなくて、楽しく笑える仲間がたくさんいた。だから、取るに足りない些細な事だった。

その日の午後も、お偉い様会議があつた。智美は昼休みに食べたお弁当とお菓子で満腹になり、頭もぼんやりと超心地良く、眠りにつきたい気分であつた。一人で仕事をしていると、刺激もなくて睡眠薬を飲んだように瞼が下がつていく。

「あかん！本当に寝てしまいそつ……」

智美は自分の頬つぺたを2、3回叩いて気合いを入れた。誰かが階段を昇ってくる足音がする。欠伸をしそうな顔を必死で堪えながら、仕事に集中した。何も言わずにドアが開いた。振り向くと梅本だつた。智美は軽く会釈だけしてパソコンに入力を始めた。梅本は黙つたまま、空いている智美の横の席に座った。

「何が」用ですか？」

パソコンの画面を見たままで智美が聞いた。

「最近智美ちゃん、ワシを避けとるやろ？」

「そのお言葉をそっくりそのままそちらにお返しします。」

「自分、ほんまに冷たいなあ～」

「私は至つて年長者は大切にしているつもりですが…」

「あのな～ワシこの前から何日か休んだやろ？あれ、なんでかわかるか？」

「さあ？だつてお聞きしたのに答えていただけませんでしたから。」

「あれな、ワシ智美ちゃんに電話替えられて連絡つかへんようになつたやろ？それで、新しい番号教えて言うたら『あかん』つて断つたやろ？ワシ、あれがショックでショックで力入らんようになつたんや。」

梅本はいつかのような憐れみたつぶりの顔付きで話してきた。

「まあ～それはお氣の毒でした。でも、私は会社の方とは誰とも連絡先を教え合つていませんよ。公私混同はしない主義なんです。」

「それは、もうええねん。せやけど、一つだけお願ひがあるんや。聞いてくれるか？」

智美は嫌な予感がした。慎重に受け答えしなくては、再び智美のせいで会社を休んだ…と言われかねない。

「聞くか聞かないかは、お願ひにもります。何でしょう。」

梅本は体を摺り寄せて近き、小さな低い声で、

「智美ちゃんのパンティくれ。今すぐ…今はいてるのを脱いでくれたらええわ。」

智美は背筋が凍りそうになるくらい身の毛がよだつた。

「無理です！絶対に嫌！！」

智美は首を振りながら手でもバッテンをしながら拒んだ。

「一枚くらいええやないか。脱いでもスカートやさかい、誰もはいてないのわからんわ。なつ、はようワシにくれ。」

益々近付いて耳元で囁いてくる梅本に智美は、

「これはセクハラですよ。やめて下さい。」

「ワシにカタカナ言つてもわからんわ。明日でもええわ。なるべく

古くてはきこなしてゐるのを頼むわ。何ならシミについてもええで。」

智美は、首を振る以外に言葉が出てこなかつた。

「ほなあ、頼んどくで～」梅本は陽気にして行つた。智美は、今言われた言葉を頭に巡らせながら呆然としていた。そして、これがいつもの冗談でありますよつに…と願うのだった。

## 第4話 サプライズ人事！！

日差しがやさしい春となつた。相変わらず梅本からのパンティ攻撃はあつたが、智美は「冗談でしょ？」と軽くかわし、申し出をすかしていた。そのうち無理だとわかれば諦める違ひない。出口が見えない根競べに、智美は「負けてなるものか！」と意志を強く固めるのであつた。四月に入り、恒例の有休休暇の残日数と本年度に新しく入る日数の合計が、食堂の掲示板に貼り出されていた。

「去年あまり休まなかつたから、かなり貯まつてきてるはずだけど…。今年は有給休暇何日もらえるのかな？」

智美は、千佳や桃子達と一緒に有給休暇の日数を確かめに一階へと急いだ。すでに情報の早い現場で働く人達が何人か群がつて、紙を見ていた。智美達もその後ろから覗き込むように背伸びをして、自分の名前を探す。そして、32日という数字を確認して、

「よし！30日越えた！」

と今年は連休でも取つて、旅行をしようかな…と思いを巡らすのであつた。

お昼休みに智美はみんなとお弁当を食べていると、淑子が慌てた様子で走ってきた。

「智美さん、ちょっとこっちへ見に来て下さい。」「

「どうした？」

「有休の用紙が…。とにかく来て下さい。」「

食べかけのお弁当にふたをして、智美は有給休暇の取得日数を貼つてある掲示板へと向かつた。

「ほらっ！ここを見て下さい。」「

淑子が指さした先には〇の数字を赤くマジックペンで囲んであつた。左横をたどつてみると、新疆の名前があつた。それは、前年度の有休が何日残っているかという欄だ。そういうえば、昨年の新疆はよく休んでいた。村のどんど焼き（お正月の飾りを燃やす行事）がある

からと言つては休み、神社の掃除があるからと言つては有休を取っていた。その上、田植えや稻刈りには必ずまとめて休んでいたし、

昨年は御祖母様の身体の調子が悪いことを理由に、度々休んでいた。

「おばが危篤やから帰るわ。」

と二三日休んだ後に勤ってきて、

「御祖母様はどうですか？」

と尋ねると、

「おばは、死なない病にかかりました。」

というブラックジョーク。女子従業員は返す言葉に戸惑っていた。そのジョークにうけたふりをして笑うのが精一杯だった。事務所で働く部下達は、

「本当に危篤なのかな？怪しいなあ～」

と新垣に聞こえないように囁いていた。智美はそんな部下達にいつも尋ねられた。

「村の行事つて、平日にもあるもんなんですか？」

「さあ～??私は村に住んでないから詳しくはわからないけど…」と首をかしげて作り笑いをしていた。しかし、度々休もうが、長期休暇をしようが困る事は何も起こなかつた。新垣のパソコンはデスクトップのままで、開かれる事なくただひたすらにらめっこをしている状態であつたからだ。この赤いマジックで囲まれている事が何を意味するのか…智美には充分わかつた。しかし厄介なのは、この事が新垣に知られた時の彼の行動だ。淑子もそれを危惧して智美を呼びに来たのである。「これを新垣さんに見られちゃ駄目よ。淑子ちゃん、この用紙剥がして！」

「は、はいっ。」

大事になるのを恐れて、有給休暇の取得日数が示された用紙は、すぐさま掲示板から外された。そして、その用紙は張り出した総務の静江の手に渡された。

「これ、どうしたらしいと思いますか？」

「とりあえず、大木さん向外した事を報告しないといけないよね。」

勝手に外したと思われても困るし。」

「大木さんに言わないと聞かせんよね。あまり気が進まないけど、仕方ないです。」

静江は、重たい気分を振り払うように勢いよく受話器を上げた。新垣が席を外していたので調度良いタイミングであった。

「もしもし、大木さん？あの…実はこの前に張り出した有休の用紙なんんですけど、落書きされていたので外したのですが…」

「落書きって何なん？誰が書いたん？」

「それはわかりません。でも、新垣さんのところに印がつけられてあつて。」

「新垣の？それはどんな落書きがされてるん？」

「新垣さんの有休残日数のところが囲まれています。」

「それは何で囲まれてるん？」

「おそらく赤の油性のマジックだと思います。」

「赤？どんな太さのなん？」

「はいっ…あのう…中細くらいかと…。」

横で聞いていた智美にも、大木が必要以上に関心を示しているのが分かつた。静江は智美の方を見ながら、整った顔を歪めていた。どうやら、オーディションの時の知りたがりが炸裂しているかの如く、根掘り葉掘りと質問攻めをしている様子だ。静江から色々と聞き出した揚げ句の果てに、その用紙を大阪の事務所にファックスするようになると指示があった。いつも虚勢を張っている新垣が、嫌味たっぷりに有休がない事を示されたのが、大木にとつては相当愉快なネタとなつたのだろう。しかし、大木も新垣の気の荒さを警戒して、「この事は誰にも言わないように。」と注意があつた。

「特に新垣には絶対に報さないように…」

との駄目だしまでついた。そんな事とは知らない新垣は、いつものように鼻歌を唄いながら事務所に入つて来た。一瞬静江と智美は凍りついたが、新垣は、

「今日はええ天気やなあ。静江ちゃんこんな日に仕事してたら笑われるで！もう、帰つてくれてもええわ。」

「ど、どうも…。」

静江は引き攣りながら、やつとの事で笑顔を作つた。新垣は気楽そくうにそのまま、唄いながら自分の席に戻り、隣の席の千佳にも何やら冗談を言つていた。

「知らぬが仏つて言うのはあの事ですね。」

新垣の気楽な様子を見ていた静江が呟いた。

「本当にそうやね。この事を知つたら、新垣さん暴れるよ。」

二人は顔を見合させてゾクッと身震いをした。新垣は、ヨーモアを持つていたし人を引き付ける話術があつた。テンポよく話すので、頭の回転が早いなあと智美はいつも感心していた。しかし自分に不都合な事があると、あからさまに機嫌を損ねた。普段は明るくて楽しいキャラをしているのに、一気に暗くなり、周りが気を遣つて話しかけても無言のまま何も開かれていないパソコンの一点を見つめているのだった。斜め前の席の桃子には、その目が恐ろしくて仕方なかつた。また、気に入らない人がいると、人気のない会社の裏庭に呼び出して胸ぐらをつかんだりもした。そういう極端な性格を知つているからこそ、大木は新垣に対して気遣いを怠つてはいられないのであった。FAXされた用紙を見て、さぞかし大阪ではこの話題で盛り上がりがついている事だろう。みんなが怒らせないように気を遣つて接している新垣に、このような挑戦的な事をするなんて、勇気があるのかただの怖い者知らずなのか…？いざれにせよ、智美は穩便に何も起こらない事を願うだけであつた。

「毎度）。」

お決まりの挨拶で大木が工場にやつて來た。大木は荷物も置かずにつすぐさま静江のところへ歩いて、

「工の前の用紙ある？」

と聞いた。静江が鍵のかかる机にしまってあったので、鍵を開ける間せつかちな大木はそのままロッカーへ着替えに行つてしまつた。

作業衣のボタンをかけながら近付いてくると、

「これが例の物か…」

と呟くと、

「これを最初に見つけたのは誰なん？」

と静江に聞いた。

「智美さんが持つて来てくれました。」

静江は助けを求めるように智美の方を見た。

「ああ…最初に見つけたかどうかはわかりませんけど、お昼休みに淑子ちゃんが知らせてくれたんですよ。」

「ふう～ん。これを掲示したのは何時なん？」

「工場長からいただいて、すぐに貼りに行きましたから、9時過ぎで…」

静江が答える途中で、大木は言葉を遮つて急かすように聞いてきた。

「上原さんは、これを見たのは昼休みが初めてやつた？」

「いいえ、貼り出されて30分くらいしてから見に行きました。千佳ちゃんと桃子ちゃんも一緒に…」

智美も答え終わるまでに、遮られた。

「その時は、この赤い印はあつたん？」

「いいえ、気がつかなかつただけかも知れませんが、なかつたと思います。」

「ふう～ん。いつ書かれたんやろ？」

大木はしばらく、用紙を手に取つてじっと眺めていた。そして、

「工の赤い油性のマジックつて、工の部署が使うん？」

と聞いてきた。静江と智美は、

「さあ～？どこで使われてるんでしょ～うね。」

と答えた。しかし、智美はそれがどこの部署で使われるかは見当がついた。しかし、犯人探しの手伝いをして、騒ぎが大きくなるのは

避けたかったので、静江と一緒に首を傾げておいた。「製造の現場で、赤いマジックは使うん？」

「きたきた…やつぱり探つている。智美は、

「基本的には黒いマジックを渡しますが、赤いのがお好みの人も見えるかも知れませんね。」

と笑顔を作りながら言つておいた。

「まあ、この紙は僕が預かっておくわ。」

大木はそう言つうと、自分の鞄へと収めた。そして、いつものように用事があるわけでもなく、事務所をウロウロと歩き回り、ついには新垣の席に話し掛けに行つた。

「なんかさあ～取り調べ受けてるみたいやつたね。」智美が静江に小声で言つた。

「人に聞いておいて、最後まで話し終わるまでに質問をかぶせてくるなんて、失礼ですよね。」

智美は深く頷きながら、笑いをかみ殺して新垣と話している大木を見た。笑いは抑えていたが、それはどこか愉快そうに見えた。

智美はいつもの如く、変わり映えのしない薄暗い製造現場を歩いていた。今日も空気が薄かつた。おまけに酷い臭いは目にもきた。異臭が鼻から入ると、その刺激で目や喉にまで不調が出てくる。智美は鼻を押さえながら速足で現場を歩いたが、覆いきれない目からは開いていられないほどの痛みで涙を流しながら書類を配つた。

「智美ちゃん！」

大きな声で呼ばれた。涙目をハンカチで拭いながら声の主を探すと、梅本だった。梅本は何故か頬っぺたを押されて、「もうダメだ。」という顔をしていた。

「ここにちは。今日の空氣<sup>むす</sup>酷いですね。」

智美は話をするとコホツと噎せ込んだ。

「ワシら可哀相やろ？こんな環境の中でこき使われて、給料は下が

る一方やー」「大変ですね。」

いつも智美にパンティをねだる梅本につきぎりしていたが、この環境で作業をしているのは本当に氣の毒に思えた。

「今日は朝から歯が痛うてなあ。この飯が噛まれへんのや。」

「あら、朝この飯を呑じ上がられてないのですか?」

「やつや。」

「この飯も食べずに作業をされでは倒れてしまこますよ。」

智美は梅本の骸骨のような身体が余計に骨をあらわにしていく事を想像すると、歩くたびにカタカタと音を立てるのではないか…と思つた。

「智美ちゃんは優しいなあー」

「いえいえ。工場の環境が厳しいのに、その上のこの飯も食べてないのでは体によくないなあと思つただけですよ。」

すると梅本がじつと智美の顔を凝視した。智美はパンティをねだられる…と思い身構えた。

「智美ちゃん、一ヤンニヤンしてくれるか?」

「えつー?一ヤンニヤン? 猫の真似ですか?」

梅本はすぐに吹き出した。「違いますよね。びっくりしました。で、それは何ですか?」

「ワシ、歯痛によつて、智美ちゃんが代わりにこの飯噛んでくれて一ヤンニヤン飯にして欲しいんや。それを口移ししてくれるか?」

「はあー? 無理です。なんで私が…」

「ワシ、智美ちゃんにして欲しいねん。」

この口親父、何を寝ぼけな事を言つてゐるのか…と智美は呆れたが、ニヤンニヤンという言い回しが可愛いかったので、いつもよりは腹が立たなかつた。

「できない事は上司の丸山課長に相談して下さいね。さつと何か考えて下さるでしょつから。」

「丸ちゃんか? あれはあかんわ。仕事も出来へんし、温泉やー。」

「温泉つて?」

「湯（言つ）ばっかりや！」

「アハハ…梅本さんにしては上手い事言つひじやないですか。」

「「」いや 智美ちゃんは厳しいなあ」

「そうなんです。私は厳しい女なんですよ。だから、一ヤン一ヤンもお断りいたします。」

「そんな殺生な。」

と言つ梅本をそつちのけに、智美は一刻も早くこの現場を逃げ出したかった。今日は酷すぎる。むせ返りそうな臭いを堪えながら、智美は

「お大事に。」

とだけ言つて現場を歩く足を早めた。

短い春が、駆け足でもするよつて通り過ぎて行つた。暖かいと感じるのはつかの間で、この工場は夏が長いのだ。機械から出される熱が拍車をかけて、工場の中はすぐに40度に達した。そこはまさに灼熱地獄だ。そして、益々休憩室は満員になる。その上、暑い現場で機械の管理をせずに、休憩ばかりして冷たいジュースを飲みまくるものだから、老若に関わらず、お腹を壊して欠勤する者が多数いた。だが不思議な事に、暑過ぎる工場の中で未だかつて『熱中症』で倒れる者はいなかつた。そんな極限になるほど頑張る意欲のある者などいない。現場作業者は、自分達の上司を見習つていた。5時になると上司の部屋の電気は消えていた。そして、定時に帰るのが少し後ろめたいのか、鞄をゴミ袋に隠し、さもゴミを捨てに行きます…というパフォーマンスまでしてこつそりと会社から姿を消していたのだった。そうなれば、現場の者達のパラダイスである。6時以降の現場には作業員が一人も居ないのだ。ただひたすら、機械が騒音を上げて動いている。刺激臭と熱い製品から出る湯気で、現場は白く霞んでいた。放置された製品が機械から垂れ流れてド

ンドン下へと落ちている。グレーの暗い色の床に落ちたその製品は、製品の形になればずに団子のように固まつていていた。このままでは、ロスが増えて無駄になつてしまつ。しかし、この緊急事態に対応すべき作業員は誰もいなかつた。智美が休憩室を開けると、所狭しと皆が休憩を取つていた。お腹が減つたのか、パンをかじる者。暑さのためにかいた汗をエアコンの前で張り付いて乾かしている者。何人かでトランプをしているグループもいた。そんな騒がしい中で爆睡している若者もいる。しかし、この休憩室の中は現場の中以上に酷かつた。煙草の煙りがもんもんと渦巻き、息苦しさはこの中の方が上回つていた。どこかうだつの上がらない輩達のたまり場に似たこの状態に、智美は言つのを躊躇つたが、勇気を出して、

「すみません！機械から製品が下に垂れていますよ。担当の方はおられませんか？」

と言つてみた。

「ああ、構へん構へん。ほつといたらいつかは終わるわ。」  
と暢気な返事が返つてきた。そして、相変わらずパンを食べたりトランプしたりと何もなかつたように、自分の時間を楽しむのであつた。この対応には智美も呆れたが、管理すべき上司達が、怖い者に追われるようにして定時で帰る様子を見ていると、こういつモチベーションになるのも致仕方ないよつて思えた。

次の日、とても驚く事態を聞かされた。新垣が事務所の課長を解かれ、製造の課長として配属されると言つのだ。正式な発表はまだなされていなかつたが、そのような噂が回る早さだけは、何処の会社にも負けなかつた。製造はこの時、丸山が課長として職務を遂行していた。そうなれば、製造課長が一人出来る事になる。どういう事なんだろう？それよりもプライドの高い新垣が製造に配置転換になるのは、どう受け止めるのであろう？智美は新垣の態度を心配した。

朝、ロッカーの中ではその話題で持ち切りだつた。静江は、「やはり、あの落書きの事が大きかつたのでしょうか？」と聞いてきた。

「それだけではないだらうけど、あの事務所での仕事ぶりでは今回の事は仕方ないやううね。」

「そうですね。」

この件に関しては、みんな同意見だつた。だが、新垣の機嫌を恐れる女子従業員達は、どのような態度で接すればよいのか？を思案していた。そして、正式な発表があるか、新垣から言い出すまでは知らない態度を通す事。聞いた時は、

「えつ！嘘でしょ？」

と驚いたように言つ事を決めた。

朝の工程会議で新垣は、製造異動を正式に発表された様だつた。会議が終わると、いつもの冗談も鼻歌もなく、背中を丸めてうつむきながら事務所へと戻つて来た。そして、横に座つている千佳と斜め前の桃子に、

「長い間、お世話になりました。」

と小さな声で言つた。千佳は知らない態度を守りながら聞いた。

「えつ！？お世話についてどういう事ですか？」

「私は、この度製造に飛ばされる事になりました。この席ともお別れです。まあ、みなさん頑張つて下さい。」

「えつ！嘘でしょ？」

台本通りに桃子が驚くと、新垣は続けた。

「私は岩崎に嫌われて、追い出される事になりました。みなさんは嫌われないように、せいぜい胡麻でもすついて下さい。」

と皮肉たつふりな口調で言つた。これには一人とも対処に困つた。沈黙の時間が流れていると、新垣の目にはうつすらと涙があおつていた。何も開かれていないパソコンを見ながら、新垣は視線を一点に集中させて涙を零さないように、必死で堪えているようだつた。

「でも新垣さん、お辞めにはならないでしょ？」

桃子が慌てて聞いた。

「岩崎がいる限り、この事務所に来る事ないでしょう。さような  
ら。」

さよならといふ言葉を強調おされて言われて、千佳と桃子は顔を見合させて困っていた。そこへタイミング良く岩崎が席に戻つて来たので、この話は途絶えた。新垣は相変わらず険しい顔をして、パソコンを眺めていた。いつもはキーボードをたたかずに、パソコンの縁に指を置いて、パタパタしていた。向かえに座っている岩崎には、キーをたたいているように見えたかも知れない。それは、小さな子供がピアノの練習をするような指の動きだつた。だが、今日はそれすらしていなかつた。虚勢を張つてる態度は息を潜め、いつもの活舌のよい冗談も出てはこなかつた。智美は遠くから、背骨を丸めて幾分小さく見える新垣の背中を眺めていた。そして、以前から新垣の仕事ぶりに疑問を抱きながらも、事務所に居させていた大木が、新垣を製造に異動させたのは、あの赤い印が後押ししたに違いないと思った。新垣を恐れて踏み切れなかつた事を、たやすく実行させたあの印をつけた主は、あっぱれだ…と智美は感心した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5576d/>

---

会社ごっこ

2010年12月23日02時12分発行